

小樽セーリング協会

・ 創立年月日 昭和24年8月6日

・ 歴代役員

年 度	会 長	副 会 長			理 事 長
昭和24年	塚 政喜				阿部 嘉一
昭和25年	大野 純一				阿部 嘉一
昭和26年	石橋 猛雄	皆川 忠雄	木村 円吉		田中 巖
昭和31年	杉江 猛	皆川 忠雄	木村 円吉		田中 巖
昭和32年	籾谷 真一	皆川 忠雄	木村 円吉		近藤 源也
昭和33年	杉江 猛	皆川 忠雄	木村 円吉		近藤 源也
昭和34年	籾谷 真一	皆川 忠雄	木村 円吉		近藤 源也
昭和35年	杉江 猛	皆川 忠雄	木村 円吉		清水 国通
昭和36年	籾谷 真一	皆川 忠雄	木村 円吉		清水 国通
昭和38年	籾谷 真一	清水 国通			葛西 尤
昭和42年	籾谷 真一	中村 哲	岩城 豪男		我妻 隆
昭和43年	中村 哲	我妻 隆	岩城 豪男		葛西 尤
昭和45年	中村 哲	我妻 隆	岩城 豪男	阿部 嘉一	葛西 尤
昭和47年	中村 哲	我妻 隆	岩城 豪男	北川 永一	葛西 尤
昭和48年	西村 慎一	岩城 豪男	中村 哲	北川 永一	葛西 尤
		我妻 隆			
昭和57年	岩城 豪男	中村 哲	北川 永一	我妻 隆	葛西 尤
昭和58年	島田 重司	葛西 尤	西沢 宏義	秋本 正	竹之内一昭
昭和59年	岩城 豪男	葛西 尤	秋本 正	島田 重司	西沢 宏義
昭和60年	岩城 豪男	葛西 尤	島田 重司		西沢 宏義
平成4年	葛西 尤	島田 重司			高島 郁夫
平成17年	高島 郁夫	左文字 利信			矢渡 英樹

・ 名称の変更

昭和24年 ・ 小樽ヨット倶楽部
 昭和26年 ・ 小樽ヨット連盟
 昭和45年 ・ 北・北海道ヨット連盟
 昭和57年 ・ 小樽ヨット協会

昭和58年 ・ 小樽祝津ヨットクラブ
 昭和59年 ・ 石狩湾ヨット協会小樽本部
 昭和60年 ・ 小樽ヨット協会
 平成13年 ・ 小樽セーリング協会

沿 革

《昭和24年》

「小樽ヨット倶楽部」として8月6日に発足。
 会長に塚 政喜 就任。日大ヨット部主将を
 務めた 阿部嘉一 が北海製缶小樽工場に着任
 し、倶楽部発足に努力する。

5mスプールを金津造船所(旧手宮駅向)で建
 造。さらにスナイプ級5艇を建設。北海製缶地
 下ポート格納艇庫を基地として活動開始。

北海道大学・小樽商科大学・札幌短期大学・
 小樽潮陵高校からヨットマンが誕生する。

「第1回北海道民体育大会ヨット競技大会」
 が函館市で開催され、小樽ヨット倶楽部とし

小樽セーリング協会

て初参加。

《昭和25年》

会長に 大野純一 就任。

小樽桜陽高校ヨット部創設。3大学2高校に、スナイプ級ヨットを1艇ずつ配布。

小樽冷蔵庫前の港内において、「第1回大学・高校ヨットレース」を開催。

これが小樽における初めてのヨットレースとなる。

《昭和26年》

「小樽ヨット連盟」に改称。

会長に 石橋猛雄 就任。

事務局を北海製缶小樽工場内に置く。

副会長に 皆川忠雄・木村円吉、理事長に 田中 廉 が就任。

第9回国民体育大会夏季大会ヨット競技会の小樽誘致に乗り出す。

「第3回道民体育大会ヨット競技会」を港祭り協賛事業として小樽港築港前海面で開催。

ラウンドボトム高性能ヨット、シーホース級を購入。

《昭和27年》

事務局を花園町の石橋診療所内に移設。

7月に、第9回国民体育大会ヨット競技会の小樽開催が決定する。

「第4回道民体育大会ヨット競技会」を祝津で開催。

《昭和28年》

国体で使用する競技艇を、色内の遠塚谷造船所及び祝津の川西造船所で、スナイプ級、A級ディンギー各40艇、合計80艇を建造する。

会場となる祝津に、1階艇庫・2階運営室及び管理人室・3階監視塔つきのヨットハウス（木造モルタル塗り）を建設。

《昭和29年》

7月23日、高松宮・同妃殿下ご臨席の下、全国20都道府県の選手・役員約500名が参加し、「第9回国民体育大会ヨット競技会」開会式を挙げる。5日間にわたり大会は開催され、

天皇杯・皇后杯ともに神奈川県が獲得。

本道勢は、いずれも10位前後で入賞を果たせず。

《昭和30年》

国体使用艇が払い下げられ、函館・室蘭など道内に捌かれたが、その大半は、札幌地区の大学・高校に買い受けられ、祝津ヨットハウスと共に、小樽のヨットは、東北（宮城県）以北最大規模を誇り、隆盛を極める。

《昭和31年》

国体ヨットで脚光を浴びた祝津は、2年後の「北海道博覧会」会場となり、水族館建設工事が始まる。

祝津へ市民の往来が盛んとなり、これを契機に、連盟会長に杉江 猛（中央バス）が就任。

《昭和32年》

阿部嘉一に代わって、国体を成功させた近藤源也（北の誉酒造）が理事長に、同社専務 粉谷真一が会長に、杉江 猛が名誉会長に就任。連盟事務局を北の誉酒造に移転。

《昭和33年》

杉江 猛 が会長に就任。

北大は、強化プラスチック・コーティングの艇体にオンデッキマストのスナイプ級を購入。

連盟事務所を中央バス本社営業所に移転。以後、会長所在地に事務局を置くこととする。

《昭和34年》

粉谷真一 が会長に就任。

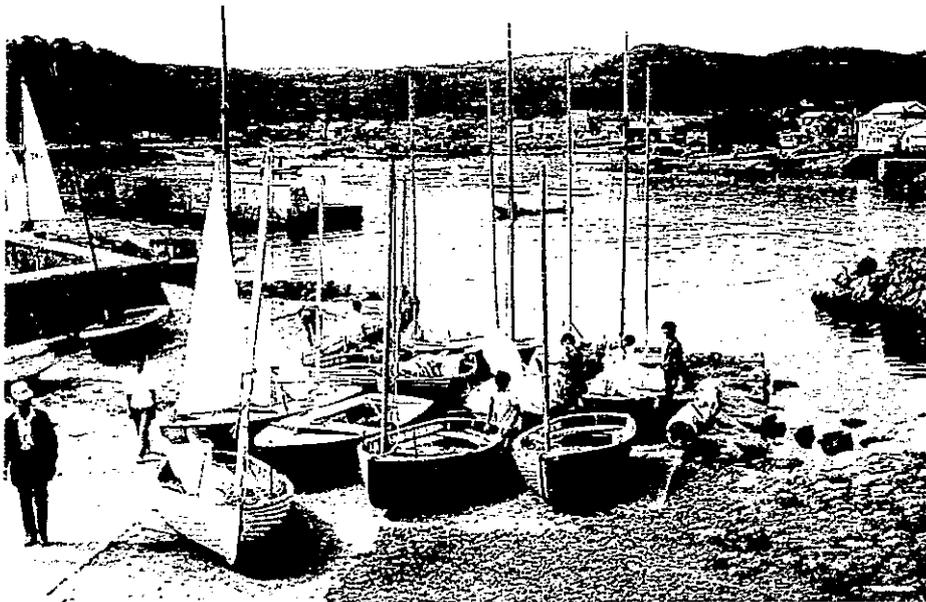
北大ヨットハウス近くの石造倉庫を合宿所及び艇庫として活用。

新素材のテトロンセールが使用され出す。

《昭和35年》

杉江 猛 が会長に、清水国通（潮陵高校）が理事長に就任。

藤野和夫・柳沢秀一組（北大）が全日本スナイプ級ヨット選手権大会で4位入賞。



昭和28～49年の光景。旧祝津漁港内の北端にヨットハーバーがあった。小さな漁船（磯舟）が入り切る切れ間がハーバーの入口となっていた。

波打ち際まで艇を並べても平気だった。

堤防外側の海は、1m程の浅瀬が張り出し、大きな波がたたなかつた。今は、浅瀬が埋め立てられ、漁港陸地部分が拡大されている。



昭和29年に「第9回国民体育大会」開催。

その時建設されたヨットハウス。昭和49年まで使用。祝津漁港修築工事により解体し、現在地に移転新築した。

小樽セーリング協会

《昭和36年》

初谷真一 が会長に就任。

地家磯之(商大)が全日本A級ディンギー個人選手権大会で、見事優勝。

旧七帝国大学定期戦を主管する。

商大スナイプ級新艇3艇購入。

《昭和37年》

青柳征二・今井栄一組(商大)は、全日本スナイプ級ヨット選手権大会で5位入賞。

「第1回国立7大学総合体育大会」を主管する。

《昭和38年》

初谷真一 が会長に、副会長に清水国通、理事長に葛西 尤(祝津小)が就任。

キングフィッシャータイプ、20フィート外洋クルーザーを北の誉ヨットクラブが購入。

《昭和39年》

インターハイ全国大会で小松 良・左文字利信組(潮陵高校)が男子スナイプ級で4位、同じく女子A級で松田・田宮組(桜陽高校)が6位に入賞する。

《昭和40年》

小樽商大は、合宿所を備えた艇庫を完成。

北大は、木造和船ディーゼルエンジン搭載救助船を購入。

高校OBにより「小樽帆友会」が結成される。

《昭和41年》

潮陵高校がFRP製スナイプ級購入。

商大は、木造和船ディーゼルエンジン搭載チャッカー購入。

《昭和42年》

中村 哲・岩城豪男の二人が副会長に、我妻 隆が理事長に就任。

春、荒天で大量遭難。

気圧計、風速計等、海難予防機器を整備補強する。

《昭和43年》

中村 哲 が会長に、我妻 隆 が副会長に、葛西 尤 が理事長に就任。連盟事務局を札幌トヨペット小樽支店に移転。

《昭和44年》

「第8回国立大学総合体育大会」を主管。

北大が、A・S両級に優勝。

祝津漁港整備事業始まる。

《昭和45年》

阿部嘉一 が副会長に就任。

小樽ヨット連盟は、「北・北海道ヨット連盟」に発展改称。日本ヨット協会直結下部組織となる。

《昭和46年》

連盟事務局を副会長 岩城豪男 宅(岩城外科医院)に移転。

《昭和47年》

北川永一 が副会長に就任。

初回バジテスト実施。

「祝津漁港整備事業に伴う小樽市祝津ヨットハーバー改築について」要望書を作成し、道当局へ提出。

《昭和48年》

西村慎一 が会長に、中村 哲 が副会長に就任。

470級がインカレに採用。

「第1回S級・470級ヨット北海道選手権大会」を主管。

北大ディーゼルエンジン搭載FRP製救助船を購入。

「当該地方ヨット活動の現況及び昭和52年への展望」を市当局へ提出。

《昭和49年》

札幌大学ヨット部結成。

FPR製スナイプ級チャバスコ北大・商大購入。

高体連FJ級採用。

「第1回普及レース兼市民ヨットレース」実施。

ヨットハウス解体のため、鯨御殿にヨットを格納。

《昭和50年》

祝津漁港副港としてヨットハーバー完成。シーズンインとともに使用開始。

小樽ヨット少年団結成。

グリーンライオンズクラブよりOP級ヨット5艇寄贈される。

レーザー級フリート活動開始。

12月新ヨットハウス完成。

《昭和51年》

「新祝津ヨットハウス」オープン。

二宮氏を招聘し、470級の指導を仰ぐ。

「東北・北海道国体女子ブロック予選」開催。

「第15回国立大学総合体育大会」開催。京都大学優勝。

商大2号救助艇購入。

連盟の事務局をヨットハウス内に移設し、初代管理人に葛西理事長入居。

少年団2人乗りジュニアディンギー2艇購入。

《昭和52年》

（南）祝津マリーナ・岩城外科医院・北川眼科医院等のご支援により、少年団はOP級ヨット5艇購入。

ヨットハウス管理人に辻 洋一 入居。

《昭和53年》

全日本強化コーチ山田、選手小笠原・中島組（電々公社・世界選手権4位）を招聘し、470級を中心に指導を仰ぐ。

8月4日、台風くずれの低気圧が、学連新人強化練習を襲い、大量遭難事故を引き起こす。

ヨットハウス管理人に福島多良入居。

《昭和54年》

小樽みなとライオンズクラブ・北海道マリン協会等のご支援により、少年団救助艇（ヤマハ和船25F ヤンマーディーゼル6PS搭載）を購入。

《昭和55年》

「第11回全道OP級選手権大会」を祝津で開催。小樽ヨット少年団は、優勝をはじめ、上位入賞を独占する。

夏休み合宿練習で、鯨御殿を宿舎とする。

《昭和56年》

「第6回全国少年少女ヨット大会」（神奈川県江ノ島）に参加し、OP級で準優勝と4位、OP級2人乗りで3位、トッパー級で6位と出場者全員が入賞の快挙を遂げる。

《昭和57年》

岩城豪男 が会長に就任。

南・北両連盟が「北海道ヨット連盟」に統合され、「小樽ヨット協会」に改称。

「第1回北海道少年少女ヨット大会」を祝津で開催。3種目の優勝をはじめ、大量入賞する。

《昭和58年》

「第22回国立大学総合体育大会」を開催。

「第8回全国少年少女ヨット大会」（山形県酒田市）において、トッパー級で優勝。

《昭和59年》

8月、「全日本レーザー級マスターズ選手権大会」開催。

国体以来のビッグレースに、島田重司 準優勝し、12月のタイのバタヤビーチで開催されたレーザー級マスターズ・ワールドに出場する。

全日本強化コーチ菊地 誠を招聘する。

「第9回全国少年少女ヨット大会」（島根県隠岐郡西郷町）において、トッパー級で村上友一 2年連続優勝を果たす。

「第3回北海道少年少女ヨット大会」を祝津で開催するも、荒天のためレースできず。

道教委及び道体協が企画する全道ジュニア強化合宿を祝津で実施する。

《昭和60年》

「札幌ヨット協会」が設立されたことにより、石狩湾ヨット協会を解散し、「小樽ヨット協会」にもどる。

「全日本ウインド・サーフィン選手権大会」を9月、銭函で開催。

前年に引き続き、全道ジュニア強化合宿を祝津で開催する。

前年に引き続き、全日本強化コーチ菊地 誠を招聘する。

《昭和61年》

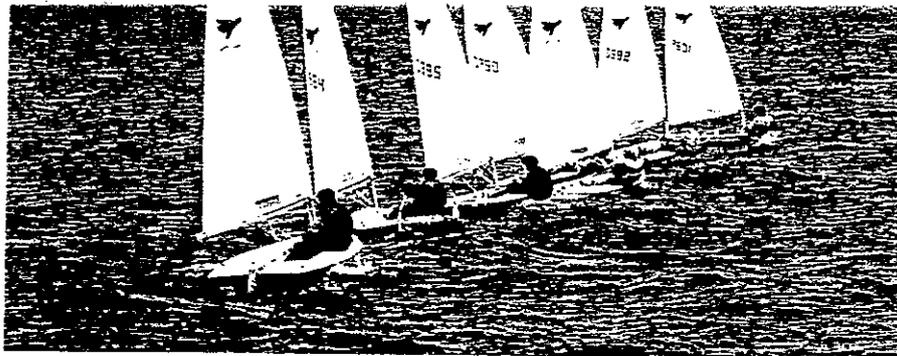
祝津ヨットハーバー防波堤延長工事始まる。

「第41回国体ヨット」（山中湖）で、成年女子スナイプ級の井上・岸川・岡野組（北大）が7位に入賞する。

江差国体事務局に出向した葛西 尤 が副会長に、西沢宏義 が理事長に就任。

ヨット少年団団長に竹之内一昭が就任。

ヨット少年団団員が小樽工業高校・小樽水産高校に入学し、ヨット同好会が設立され、それに伴い道連強化艇を貸与する。



国体艇種シーホッパー級SRのスタート直前。

少年男女・成年女子に採用されている。

国体で少年男女各1回ずつ準優勝し、ユースワールド日本代表も輩出している。

470級のスタート。
クランカー張りガブリグのA級ディンギーに替わり、ラウンドボトムでトラビーズやスピナーカーを備え、ハイテク時代が到来する。

日本人向きで、オリンピックのメダルは男女ともこの種のみ。



昭和51年に完成した現ヨット・ハウス。

左隣に祝津マリーナ・上奥には水族館上部が見える。

写真は、出艇前のミーティング風景。

斜路に選手が集まっている。

《昭和62年》

江差町で開催された、「全国高校総体ヨット競技会」に多数の役員を派遣する。

岩城豪男より、少年団救助艇（ヤマハ和船26F ヤンマー高速ディーゼル・インポートアウトドライブエンジン搭載）の寄贈を受ける。

《昭和63年》

「はまなす国体リハーサル大会」に競技役員を大量派遣する。

「第43回国体ヨット競技会」（京都）北海道選手団副団長に岩城会長がなり、競技役員に4名、選手監督に9名を派遣する。

島田重司小樽ヨット少年団3代目団長に就任する。

《平成元年》

「第44回国民体育大会夏季大会ヨット競技会」が江差町で開催され、競技役員の重要ポストを小樽勢が努め、大会成功に導く。

「日本ヨット協会主催第16回普及レース」を祝津で開催。これに「全道シーホッパー級選手権大会」を組み込む。

参加艇多数のため、「第8回北海道少年少女ヨット大会」を小樽港内及び築港ヤードに会場を移し開催。

潮祭り協賛「ボート天国」に参加。

救助艇船台を島田重司が寄贈。

《平成2年》

「第29回国立大学総合体育大会」開催。京都大学優勝。

葛西 尤 江差町より帰郷し、ヨット少年団名誉団長に就任。

《平成3年》

川合一成 名誉会長に就任。

ヨットハウスに温水シャワー新設。屋外水道施設増設。

「第1回小樽みなとライオンズ杯少年少女ヨット大会」をマリンウェーブ小樽を会場とし、小樽港内海面でレースを行う。

島田重司団長よりOP艇（ウィナー）3艇、小樽みなとライオンズクラブよりOP艇（ウィナー）1艇の寄贈を受ける。

《平成4年》

葛西 尤 が会長に、高島郁夫 が理事長に就任。

《平成5年》

小樽港内を舞台として繰り広げられた「第8回海の祭典」に協力。

ホムルスク市より少年ヨット選手団（8名）が参加。

国際親善少年ヨットから外洋クルーザーまで各種レースを展開する。

《平成6年》

「小樽ヨット少年団創立20周年記念祝賀会」を11月12日（土）豊楽荘で開催。

《平成7年》

葛西名誉団長OP級ヨット（ユナイテッド）1艇寄贈。

インカレ予選で、個人戦が7月・国体戦が10月と開催日が分かれる。

「ボート天国」が潮祭りの祭事として組み込まれる。

《平成8年》

葛西 尤 日本ヨット協会監事に就任。小樽・ナホトカ姉妹都市提携30周年を記念し、祝津マリーナの外洋ヨット3艇13名の訪問団団長を務める。

《平成9年》

「第36回国立大学総合体育大会」開催。九州大学優勝し、北大もよく健闘し、準優勝。

「なみはや国体」一般男子スナイブ級で、大久保・伊藤組3位入賞。

《平成10年》

祝津漁港高度利用活性化対策事業として、堤防の修復改良工事実施。

北大・商大新艇庫合宿所、水族館遊園地観覧車左上高台に着工し、年度内完成。

小樽みなとライオンズクラブ主催「臨海学校」を開催。親子120名の参加があり、ヨット体験乗船を実施。

石川一男 指導陣に加わる。

《平成11年》

春、「大学新艇庫合宿所落成祝賀会」とあわせて「北大・商大創部50周年記念祝賀会」開催。

祝津ヨットハウス屋上漏水防止工事施工。

11月27日(土)「小樽ヨット協会創立50周年・小樽ヨット少年団創立25周年記念式及び祝賀会」を豊楽荘にて開催。

《平成12年》

「第19回北海道少年少女ヨット大会」を祝津で開催。

祝津ヨットハウスの艇庫シャッターを1基取り替え。

《平成13年》

世界は「ISAF」、日本は「JSAF」、北海道が「セーリング連盟」となり、小樽も慣れ親しんだ「ヨット協会」から『セーリング協会』に改称する。

オリンピック強化コーチ小松一憲を招聘し、強化練習実施。

「祝津チャンピオンシリーズ」始まる。

《平成14年》

小松一憲招聘強化練習(6月)、杉山・金田招聘強化練習(7月)を実施。

ヨットハウス無人化になる。

2年目を迎えた「祝津チャンピオンシリーズ戦」会員交流の輪を広める。

《平成15年》

「第22回北海道少年少女ヨット大会」を祝津で開催。

6月、小松一憲招聘強化練習実施。

《平成16年》

「第43回国立大学総合体育大会」開催。九州大学優勝。応援の京都大学1年生、日和山崖下転落し重傷を負う。

《平成17年》

会長に高島郁夫、副会長に左文字利信、理事長に矢渡英樹が就任。

《平成18年》

「第25回北海道少年少女ヨット大会」を小樽築港臨海公園及び既存貯木場で開催。

「第6回全日本チームレース選手権大会」を開催。中央より2チーム、地元4チームの6チームによるレースとなるスナイプ級を使用。

1チーム3艇の2チームによる対抗戦で、ジブセールがチーム別のカラーセールを使用して観覧側にとって勝敗が明瞭と好評を得る。